

牛群検定通信 No114

～飼料の切り替え～

秋の日はつるべ落とし、とは良く言ったもので、日がどんどん短くなり、秋が深まっています。夜空には、秋を代表する星座ペガサス（ペガサス、天馬）が天空を気持ち良さそうに駆けています。この時期は、冬に向けて飼料の切り替えなども行われる時期です。今回は、このような牛群全体にかかる作業を行った場合に、注意して頂きたい検定成績の活用を紹介します。

1 移動13カ月成績（検定成績1枚目）

（1）乳量、乳成分

13カ月を遡って、月々の成績推移を見ることができます。もし、飼料の切り替えがうまくいっていないとき、極端な例では下痢などで体調を崩す牛が続出していれば乳量が前月より大きく減量することになります。今の時期の都府県は、乳量と乳成分ともに回復期であり、12月の冬至ごろまでは上昇が期待されます。それが停滞するようであれば、飼料の切り替えとは限りませんが、牛群全体にかかる何らかのトラブルが発生していることが考えられます。

（2）P／F比

13カ月を通してみて、今月のP／F比はどうですか？牛群としてみるP／F比は、ちょっと厳し目の0.8～0.9が適正です。飼料の変更でありがちな、サイレージの失敗、乾草のカビ、乾草への雑草混入などが発生すると選り食いを行うようになり、P／F比が0.9以上となる傾向があります。

また、粗飼料設計でエネルギー不足となっていれば、P／F比は0.8以下となります。

(3) MUN

MUNは10～14 mg/dlであれば、飼料中の蛋白質分は適正と言えます。
また、10以下と低い場合であっても乳蛋白質率が3.4%以上と十分に高ければ適正と言えます。

2 個体成績（検定成績2枚目）

(1) 乳量

乳量を前月と比較して20%減少を示す小さな▼マーク、40%減少を示す大きな▼マークに注目します。今月の検定において、この▼マークが今月合計の欄に各検定牛に大量に出ているときは要注意です。「▼が縦に並ぶ」という状態です。これは、各検定牛が一斉に乳量を下げたということでトラブルが発生していることが考えられます。

(2) 乳成分

大半の各検定牛の乳成分のミニグラフの棒が振りれるかのように、乳脂率と乳蛋白質率の両方が高い値となった場合、サイレージの酪酸発酵が考えられますのでご注意ください。乳質が向上したと喜ぶことは禁物です。